

比較文化の視点から見た教材と指導法

広島大学 深 沢 清 治

1 はじめに

英語教育において異文化理解は常に目標の一部をなしてきたが、言語材料中心の指導の陰で常に文化的「背景」に留まり、体系的・組織的指導につながるよりも、教科書の題材に関連した風物・背景知識や、語彙・表現レベルでの知識としての断片的理解が中心であった。このことは、従来の英語教育が受信型中心であったことにも関係が深く、社会文化的背景の違いから日英語の意味のずれが誤った理解を起こす可能性が指摘されるに留まってきた。近年の、異文化交流の急速な進展の中で、将来の学習者には face-to-face interaction において直接的な交流を行なう能力をつけさせることを目指した発信型の英語教育への転換が求められている。そのためには、比較文化の視点からの今後の教材には、文化の情報の「知識化」を目指すだけでなく、相手が異なればものの見方・考え方、すなわち文化の相違が存在することの「意識化」、さらには、異なる文化における performance につながる「行動化」を促すものを含む必要がある。言語材料の副次物としての文化の指導に加えて、比較文化に基づいたより意識的・組織的な文化の指導を教室に位置付けるための教材及びその指導法のあり方について考える。

2 英語教育における文化

(1) さまざまな定義・意味

英語教育においてこれまでに表われた文化の定義の多くは、Chastain(1976, 1988)の、Large C Culture (人文科学的意味による芸術・文学といったある社会の傑作の総体としての文化)と small c culture (人類学的意味による、生後に学んでいくある社会の生活習慣、ものの見方、考え方、価値観としての文化)の2つに集約される。このうち英語教育の対象とすべき後者の文化範疇は、抽象的であまりに範囲がありすぎるため、具体的な教材・指導法への取り組みは散発的なものになっていた。近年、Adaskou et al.(1990)はこれまでのChastainらの分類を踏まえた上で、aesthetic、(Culture with a capital C)、sociological (culture with a small c)、semantic, pragmatic (or sociolinguistic)の4つの分類を行っている。これまでの「ものの見方、考え方、価値観」といった抽象概念の集合から、より具体的に異文化間における理解・誤解を生み出す原因となるコミュニケーション規則としての文化の記述へと変化してきている。

(2) 英語教育の目標としての異文化理解

英語教育における異文化理解目標は、テキストの理解を補助するための風物・社会的背景の理解から、学習者が現在あるいは将来、遭遇する対人間交流において必要な知識・技能の習得へと

具体化している。これに応じて、英語教育における異文化の扱いの焦点も、当該文化および目標言語の社会文化的状況についての情報の理解から、異文化場面・状況での適切な行動へと、次のような3段階に分類される。

Lafayette & Schulz (1975)	Stern (1992)	和田 (1991)
Knowledge	Cognitive (knowledge / awareness)	情報としての国際理解
Understanding	Affective (interest/curiosity/empathy)	文化的感受性の育成
Behavior	Behavioral (receptively/expressively appropriate)	行動化

今後の英語教育においては「知識」としての異文化理解から、異文化間のコミュニケーションにおいて文化相対主義に立った寛容な共感的「理解」ができ、さらに必要に応じて社会文化的に適切な言語「行動」がとれることを目指していくべきである。このような異文化コミュニケーション能力は Canale and Swain (1980), Canale (1983) の Communicative Competence の4つの下位能力のうち、文法能力にとどまらず、「いつ、どこで、誰と、何を、どのように話すか（話さないか）」という場面・状況における適切さに関わる社会言語学的能力、あるいは、具体的な発話行為においての方略としての pragmatic な能力とも密接に関わっており、目標として位置づける必要がある。

(3) 言語上の誤りと文化上の誤り

従来の英語教育の主要な関心は文法能力の養成であった。誤りの観点から見れば、文法をはじめとする形式上の誤りは理解を妨げたり、聞き手に不快感を持たせることもあるが、誤りは顕在的であり、母語話者は非母語話者の発話の文法上の逸脱には寛容である。これに対して、発話の適切さに関わる文化上の逸脱 (pragmatic failure) は、一般の母語話者にとって潜在的であり、文法能力と発話の適切さは共起することが期待され、その規則違反が人格上の問題と判断されることもあるという (Thomas 1983)。社会言語学的能力の習得のためには、当然それに必要な文法能力を獲得しておかねばならない。しかしながら、言語的能力があれば社会言語学的能力が自動的に発達するものでもない。言語的側面で母語からの干渉があるように、社会文化的側面においても、ある発話行為（「依頼する」、「謝る」、「断る」etc.）において、自分の文化におけるコミュニケーション規則からの sociocultural transfer あるいは pragmatic transfer (Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz 1990) が存在するものと思われる。また、非母語話者の言語上の誤りには許容度が高いのに対して、文化上の不適切な行動は、誤解を生み出す可能性が大きい。異文化間のコミュニケーションの機会が増えてきた現在において、異なった言語話者集団の間の pragmatic rules に関する実証的研究が進んでおり、それらの結果をもとにした教材開発や、指導の工夫が期待される。

3 比較文化を目指した教材— cross-cultural sensitizer

(1) 文化の扱いによる教材の種類

教科書をはじめとする英語教材において、伝統的な比較文化の扱いは、言語材料面では、単語（色の持つ意味など）、語法・文法（物主語構文など）、表現（Good byeの起源など）の側面から、あるいは題材面においては風物的色彩の強いもの、習慣・伝統・社会規制、文化のエトスにふれるもの、の観点からであった。特に、近年の教科書では異文化理解を目指した題材面での著しい進歩が見られるが、依然として言語材料の背景として、体系的な指導プログラムに乗っているわけではない。これに対して、異文化理解指向の教材は、現実的な対人間交流場面での異文化衝突を素材としたものや (Levine et al. 1987)、言語機能別に異文化間で誤解を生じやすい行動 (face-threatening acts) をもとにしたもの (Brown and Levinson 1987)、などがあり、それらの多くは主としてアメリカ文化への適応訓練 (culture assimilator) としての ESL教材である。今後、日本人学習者向けのそのような教材がさらに充実することが望まれる。

(2) 社会言語学的研究の結果から

異文化間での誤解の場面は断片的なエピソードとして語られることが多かったが、言語的側面と統合的に異文化理解・コミュニケーションを進めることをねらった教材作成のための基礎データの収集には、近年の社会言語学の研究の進展に期待するところが大きい。現在の異文化間での sociolinguistic / pragmatic research の方法として、ある特定の発話行為（「約束に遅れたことを謝る」、など）を想定した場面に対して、非母語話者と母語話者の反応をアンケート法などにより誘出し、両者の問題解決の規準の類似・相違点を調査・分析する方法がとられている。これまで、主な発話行為別に次のような研究から、文化上の規則が明らかになりつつある。

Altman (1990)	giving/taking advice (should/had better)
Beebe et al. (1990)	refusal
Blum-Kulka and Olshtain (1987)	requests and apologies
Brown and Levinson (1987)	politeness
Cohen and Olshtain (1981)	apologies
Eisenstein and Bodman (1986)	gratitude
Grimshaw (1973)	requests
Wolfson (1981)	compliments

また、諸研究の結果から、英語話者と比較して、日本人の次のような特徴が指摘されている。

- ・沈黙を多用し、不満の表われと誤解されることがある
- ・会話に積極的に参加するというよりは、聞き手、情報の受け手にまわることが多い
- ・状況や相手を考えずに、堅苦しい言い回しや表現が多い
- ・ものを尋ねたり、相手に何かを依頼したりする際に、丁寧なつもりでも相手に選択の余地を与えず押し付けがましい、詰問調になり誤解を受けやすい
- ・事情を述べたり、言い訳をする際にはっきり理由を言おうとしない
- ・話相手の地位に敏感であり、目上のものには遠慮、卑下しがちで、逆に目下の者に対しては単刀直入に言ったりする
- ・「断わる」際には、初めに「感謝する」表現をにおいて、殆どの場合「謝る」表現を付ける

既存の異文化理解教材には「事実文」中心の解説型の比較文化が多く、「関係文」と呼ばれるような対人間の、しかも「意見の食い違いを述べる」「謝る」ような communicative conflict をもとにした問題解決型の比較文化は少ない。実際の異文化コミュニケーションにおいて、誤解が生じるのはこのような場面での微妙な発想・思考形式の違いによるものであり、学習者の言語能力のレベルを考慮しながら意識的な異文化理解教育のためには、cross-cultural sensitizer としての問題解決アプローチによる比較文化教材を導入することには意義があるであろう。¹⁾

4 比較文化を目指した指導——大学生を対象に

(1) 異文化理解診断テスト——「呼びかけ」について

英語科教員養成において、平成2年度より「比較文化(外国事情を含む)」が必修単位化されたことに伴い、比較文化関係の授業科目が開講されるようになった。そこで、言語能力に関してはかなり高いと思われる英語専攻の大学生に対して、異文化行動規則の学習を目指した指導を以下のように試行してみた。

時期： 1991年度後学期10月～2月

受講生： 国立大学教育学部国際文化教育課程(英語文化分野専攻)3年次生8名

科目： 比較文化学演習Ⅳ

教材： Levine, D. et al. 1987. The Culture Puzzle: Cross-Cultural Communication for English as a Second Language. Prentice-Hall Regents.

まず、授業に先立ち、異文化理解能力診断のために次のようなテストを行なった。

Cross-cultural Diagnostic test (Addressing people)

アメリカの英語学校でのクラスの初日に、アメリカ人の女性教師 Rose Arnoが自己紹介をしています。世界各地から来ている生徒たちも教師に自己紹介をしています。次の会話で不自然な箇所があれば、書き出して適切な言い方に直しなさい。

Rose Arno: I would like to introduce myself. My name is Rose Arno. If you want, you can use Mrs. or Ms. with my name.

Naima Moud: How do you spell your name, Mrs. Rose?

Rose Arno: (Wrote her name on the board.) Now, I'd like you to give your names. Let's start.

Yoshi Imada: My name is Imada.

Rose Arno: O.K. Let's continue with the second student. What's your name?

Magdalena Chavez: My name is Magdalena Chavez, but people call me Lena, teacher. That's my nickname.

Rose Arno: O.K. We'll call you Lena. (The teacher continues to ask the students to introduce themselves.)

Adapted from D. Levine et al. (1987)

その結果、相手の呼び掛け方についてMrs. Rose(Mrs. Arno), Imada(Yoshi, Yoshi Imada), teacher(Mrs, Arno)のような基礎的な事項の理解が30%を下回っているのが分かった。同時に行なったテストにおいても、'please'を文頭・文尾に付ければ丁寧な表現になると感じている学習者がいることも分かった。このような結果から、文法知識として理解したものが社会文化的知識あるいは運用力として自動的に発展していないと言えよう。

(2) Cross-cultural interactionをもとにした指導——「ほめる・感謝の気持ちを表す」

このような異文化理解診断テストに基づいて、「比較文化学演習IV」において Levine et al. (1987)から毎週1つの言語機能をもとにした対話(Cross-cultural interaction)を教材として使用した。使用した教材例のうち、「ほめる・感謝の気持ちを表す」をトピックとしたものは次のとおりである。2つの対話は、それぞれ ESLクラスでの教師と学生の対話で、異文化間での社会文化的な干渉を受けたと思われるやり取りと、その改訂版である。

[Original]

**CROSS-CULTURAL INTERACTION 2A:
Cultural Differences**

Situation: Jonathan is a teacher in an adult school class in the United States. After class, he is speaking to Anh, one of his students.

- Jonathan: "Anh, your English is improving. I am pleased with your work."
Anh: (looking down) "Oh, no. My English is not very good."
Jonathan: "Why do you say that, Anh? You're doing very well in class."
Anh: "No, I am not a good student."
Jonathan: "Anh, you're *making progress* in this class. You should be proud of your English."
Anh: "No, it's not true. You are a good teacher, but I am not a good student."
Jonathan: (He is surprised by her response and wonders why she thinks her English is so bad. He doesn't know what to say and wonders if he should stop giving her compliments.)

[Revised]

CROSS-CULTURAL INTERACTION 2B

The following interaction shows Anh responding in a way that is culturally familiar to Jonathan.

- Jonathan: "Anh, your English is improving. I am pleased with your work."
Anh: (making eye contact) "Thank you. I have learned a lot in this course."
Jonathan: "You're doing well and I can really see progress."
Anh: "I enjoy studying English. I do homework every night."
Jonathan: "I can see that. *Keep up the good work.*"
Anh: "I'll try. You are a good teacher. You have helped me a lot."

演習授業においては、2つの対話の役割練習、理解の後、2つの対話の相違点について、あるいは受講者自身が日本人学習者として、このような場面でどのように応答するか、などについて意見や感想を出させた。こうした指導によって、何をどのようにほめるのか、あるいはほめことばに対してどのように反応するのか、について英語社会での一般的特徴の理解へと導入した。

続いて、日本の中学校英語教科書の中に、ほめ言葉とそれへの対応として、次のようなやり取りがあることを示した。

A: 'You have a nice dog.'

B: 'Thank you.'

このような反応は 'bald' Thank you と呼ばれるが、英語の社会言語学的ルールによれば、次のような一言を加えるのが一般的という (Eisenstein and Bodman 1986)。

'bald' thank you vs thanking + complimenting (You're wonderful)
+ reassuring (Just what I wanted)
+ promising to repay (I'll pay you back as soon as I can)
+ expressing surprise and delight (Oh, Wow!)
+ expressing a lack of necessity or obligation (You didn't have to)

アメリカ英語においては、「感謝する」際に、何らかの返礼の気持ちを表すことが必要とされている。英語話者にとって、日本人の行動は一般に丁寧と思われているが、言語使用においてはアメリカ英語の「丁寧さ」のルールに必ずしも合っておらず、むしろ非言語および行動要因によってそのような感じを持たれているのかもしれない。言語教育である以上、ことばそのものの中にある「丁寧さ」のルールの相違にさらに着目していくことが重要であろう。

最後に、半期間の「比較文化学演習Ⅳ」の授業を通して、受講生からの主な感想は、次のようなものであった。

- ・日本語・日本文化と違いが多かった。直訳できない部分が多い。
- ・日本人よりもみんな一言以上多いと感じた。
- ・頭では分かっているが、英語圏の文化ルールにあった反応ができるか自信がない。
- ・文化は違っても、考えていることの中には共通性があり、その表現形式だけが違うのかもしれない。

文化の表層的な違いのみの理解に留まらず、文化間での culture general / culture specific な違いに受講生が着目できたことは一つの成果であった。異文化理解は英語の形式面の学習から無意識的に得られるものではなく、意識的な指導を通して目を開かせることにより得られるものと言えよう。

5 おわりに

異文化理解・異文化コミュニケーションの必要性が指摘されるにつれて、英語教科書にも比較文化事項が盛り込まれるようになってきた。日本という環境で外国語としての英語教育という状況の中での異文化理解・異文化コミュニケーション教育の必然性や可能性を考えれば、すぐさま「行動化」のレベルを到達目標とすることは困難であろう。しかしながら、従来の文法能力のみ

に留まらない、異文化の意識化 (cross-cultural consciousness raising)こそ現実的な目標として教室に取り入れていかねばならない。今後、比較文化の視点を英語授業の中へ統合的に取り入れていくためには、従来の culture aside と呼ばれるような、その場限りの説明では不十分である。学習指導案の中に、言語材料とともに、「文化材料」として毎時間の授業に位置づけていくためには、比較文化内容の選択と配列に基づいた文化のシラバス (cultural syllabus) を模索していく必要がある。

【 注 】

¹⁾ 参考書・教材例としては次のようなものがある。

- Blundell, J. et al. 1982. *Function in English*. Oxford Univ. Press.
- Ford, C., A. Silverman, and D. Haines 1983. *Cultural Encounter: What to Do and Say in Social Situations in English*. Pergamon.
- Levine, D. et al. 1987. *The Culture Puzzle: Cross-Cultural Communication for English as a Second Language*. Prentice Hall Regents.
- Levine, D. and M. Adelman 1982. *Beyond Language: Intercultural Communication for English as a Second Language*. Prentice-Hall.
- Sakamoto, N. and R. Naotsuka 1982. *Polite Fictions: Why Japanese and Americans Seem Rude to Each Other*. Kinseido.
- Bull, R. /井出祥子 1979. 『英語のていねい表現』オックスフォード大学出版局.
- 大杉邦三 1982. 『英語の敬意表現』大修館書店.

【 参 考 文 献 】

- Adaskou, K., D. Britten, and B. Fahsi 1990. 'Design decisions on the cultural content of a secondary English course for Morocco,' *ELTJ*, 44, 1, 3-10.
- Altman, R. 1990. 'Giving and taking advice without offense,' in R. Scarcella et al. eds. 1990, 95-106.
- Beebe, L., T. Takahashi, and R. Uliss-Weltz 1990. 'Pragmatic transfer in ESL refusal,' in R. Scarcella et al. 1990. 55-73.
- Blum-Lulka, S. and E. Olshtain 1984. 'Requests and apologies: a cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP),' *Applied Linguistics*, 5, 3, 196-213.
- Chastain, K. 1976, 1988. *Developing Second-Language Skills: Theory and Practice*. Harcourt Brace Jovanovich.
- Cohen, A. and E. Olshtain 1981. 'Developing a measure of sociocultural competence: the case of apology,' *Language Learning*, 31, 1, 113-134.
- Damen, L. 1987. *Culture Learning: The Fifth Dimension in the Language Classroom*. Addison-Wesley.
- Davies, E. 1987. 'A contrastive approach to the analysis of politeness formulas,' *Applied linguistics*, 8, 1, 75-88.
- Eisenstein, M. and J. Bodman 1986. 'I very appreciate: expressions of gratitude by native and non-native speakers of American English,' *Applied Linguistics*, 7,

- 2, 167-185.
- Grimshaw, A. 1973. 'Rules, social interaction, and language behavior,' TESOL Q, 7, 2, 99-115.
- Hammerly, H. 1982. Synthesis in Second Language Teaching. Second Language Publications.
- Holmes, J. 1989. 'Sex differences and apologies: one aspect of communicative competence,' Applied Linguistics, 10, 2, 194-213.
- Lafayette, R. and R. Schulz 1975. 'Evaluating cultural Learning,' in R. Lafayette. ed. The Culture Revolution in Foreign Language Teaching. 104-118.
- Loveday, L. 1982. The Sociolinguistics of Learning and Using a Non-Native Language. Pergamon Press.
- Scarcella, R. et al. eds. 1990. Developing Communicative Competence in a Second Language. Newbury House Publishers.
- Seelye, H. 1984. Teaching Culture: Strategies for Intercultural Communication. National Textbook Company.
- Stern, H. 1992. Fundamental Concepts of Language Teaching. Oxford Univ. Press.
- Tannen, D. 1984. 'Pragmatics of cross-cultural communication,' Applied Linguistics, 5, 3, 189-195.
- Thomas, J. 1983. 'Cross-cultural pragmatic failure,' Applied Linguistics, 4, 2, 91-112.
- Thomas, J. 1984. 'Cross-cultural discourse as "unequal encounter": towards a pragmatic analysis,' Applied Linguistics, 5, 3, 226-235.
- Valdes, J. ed. 1986. Culture Bound: Building the Cultural Gaps in Language Teaching. Cambridge Univ. Press.
- Wolfson, N. 1981. 'Compliments in cross-cultural perspective,' TESOL Q, 15, 2, 117-124.
- Wolfson, N. 1989. Perspectives: Sociolinguistics and TESOL. Newbury House.
- Wolfson, N. and E. Judd eds. 1983. Sociolinguistics and Language Acquisition. Newbury House.
- 鶴田庸子/ポール・ロシター/ティム・クルトン 1988. 『英語のソーシャルスキル』大修館書店.
- 和田 稔 1991. 『国際交流の狭間でー英語教育と異文化理解』研究社出版.